

レヴィナスにおける存在を悪とすることの妥当性

小川 真未 (中央大学大学院博士後期課程)

レヴィナスの思想初期の著作『実存から実存者へ』は、その著作全体がハイデガーへの批判を基軸としている。その批判の出発点となるのが、ハイデガーの存在を目指す姿勢そのものである。それゆえにレヴィナスは、そのハイデガーの存在を目指すという姿勢に対し以下のように問うところから始める。

存在は自らの限界と無とは別の悪性(vice)を抱えてはいないだろうか。存在の積極性そのもののうちに何かしら根本的な悪があるのではないか。(EE20/27)¹

そのように問うことから見出されたのが、存在の悪性である。そしてその存在の悪性は、存在そのものとしてのイリヤの恐怖、また存在者自身の存在の重さとして示される。また『全体性と無限』で示される、存在論的な<同>の体系(他を共に同一化すること)もこれに含まれるであろう。しかし、そのように悪とするところの存在の内実が示される一方で、実際に存在を悪とすること自体の妥当性は精査されていない。つまり、イリヤが恐怖であること、また存在者自身の存在が重いこと、さらに<同>が<他>を吸収してしまうこと、それらは本当に悪と言える事態であるのかということ自体は考察されていないのである。しかし、この考察がなされないのであれば、以上のように存在を悪とすることは、レヴィナスによる恣意的な判断と見なされうる。したがって、これらの存在を悪と考えるレヴィナスの判断の妥当性自体を問い直す必要がある。

そのためにはまず、レヴィナスが自身では詳しく言及していないところの悪の基準を明確にする必要がある。というのも、このことを明らかにすることによって初めて、レヴィナスが悪としているものの妥当性や、またその基準そのものについても考察することができるからである。したがって、本発表ではレヴィナスが存在を悪としているところの、その悪の基準を明らかにし、存在を悪とすることに実際に妥当性があるかどうかを考察する。

以上のような考察の手がかりになるのが、『実存から実存者へ』の冒頭序文において示されている、善への言及である。というのも、この善の概念は、レヴィナスによって明確に説明されていないところの悪の概念の対概念として理解することができるからだ。したがってこの善の概念を理解することで、その対の悪の概念の理解にも役立つのである。その善については以下のように言及されている。

ここでは、<善>(Bien)の問題、<時間>、<善>に向かう運動としての<他人>との関係へと割り当てられたより広範な探求のうちのいくつかのテーマに触れ、それらを踏破している。<善>を存在の彼方に置くプラトンの定式が、

この研究を導く最も一般的で最も空虚な指標である。この定式の意味するところは、存在者を<善>の方向へと導く運動が、存在者を高次の存在へと高める超越(transcendence)ではなく、存在とそれを記述する諸々のカテゴリーから外に出ること、つまり過・越(ex-cendence)だということである。(＜＞は本文大文字)(EE9/9)

この引用において重要な点は、善が存在を超えたものということである。つまり、レヴィナスは存在を悪としたのに対し、存在とそのカテゴリーの外にでることを善としたのである。

では、なぜそのように存在を悪とし、存在の彼方を善としたのか。このことを他の著作も参考にしつつ、明らかにすることで、その基準の妥当性を考察する。

¹ EE: *De l'existence à l'existant*, VRIN, 2004, [1947] (『実存から実存者へ』 西公修訳、ちくま学芸文庫、2019年)